題目：　日本語学における感動詞分析 ―「へえ」「あっ」「はい」を例に―

発表者：　冨樫純一（大東文化大学）

要旨：

本発表では、日本語学において感動詞に属するとされる表現がどのように分析、記述されているのかを概観する。

感動詞は話し言葉に頻出する表現であるため、談話分析的（相互行為的）観点からの用法や効果の記述が中心となっている。一方で、感動詞そのものに内在する意味（本質的機能）についての分析も進みつつある。内在する意味とはすなわち「心内処理のモニター標識」である。話者の心内でどのような情報の処理が行われているのかを感動詞が示すものと捉え、心内の処理を細分化することで、諸形式との対応を見出していくことが可能となる。

よって、感動詞に対するアプローチは、心内処理の観点から分析する「認知的アプローチ」と、相互行為の中での感動詞使用を分析する「談話分析的アプローチ」の二つの方向性があるといえる。認知的アプローチにおいては、いわゆる負の観察に基づく細かな意味記述が可能であるというメリットがあり、談話分析的アプローチでは実例に基づく多様な談話的効果の分類が可能であるというメリットがある。もちろんそれぞれに足りない側面もあるため、両者のアプローチを有機的に結合していくことが将来的に必要となろう。

ここでは、認知的アプローチの観点から日本語感動詞の分析例をいくつか示すこととする。意味が似ていると思われる感動詞の比較をもとに意味分析を試みる。

一つ目は「へえ」「ほう」「ふーん」である。これらは情報の獲得を示す感動詞であるが、用例を観察してみると微妙な差異が認められる。「ふーん」は得た情報に対して中立的な意識、「へえ」はある程度肯定的な意識、「ほう」はかなり肯定的な意識、といった違いが認められる。これは情報の関連付けという心内処理の側面を踏まえて記述することができる。

二つ目は「あっ」「わっ」である。「あっ」と「わっ」は驚きという感情表出を担うものとしてひとくくりにされがちな感動詞であるが、驚きは受け手の側からの解釈の面が強い。驚きという表層の内部でどのような心内処理があるのかを考えると、変化点の認識や意外性というラベリングといった特徴が見出される。

三つ目は「はい」「うん」である。「はい」「うん」は、一般的に丁寧さの有無という相互行為的視点からの位置付けが、ある意味常識的な事実となっているが、負の観察を含めた用例観察をすると、心内処理の側面による記述も可能となる。情報獲得の側面においては、情報の関連付けの多さ／少なさという差異があると分析できる。